

「荒城の月」

野瀬 隆平

我々が慣れ親しんできた日本の抒情歌や唱歌の中には、原曲が外国のものがかかなりある。例えば、「埴生の宿」はイングランド民謡であり、「旅愁」を始めとして「故郷の空」や「庭の千草」など全て外国のメロディーだ。

明治の初めに、教育的な目的もあって歌を普及させようと考えた人たちは、外国の曲に日本語の詩をつけたのである。

そんな中で、滝廉太郎が作曲した「荒城の月」は、日本オリジナルの曲だと思っていた。しかし、これも元はと云えば外国の曲だった、という説があるのを最近知った。

その根拠として先ず挙げられているのが、東京音楽学校（現在の芸大）の資料の中に、この曲は滝廉太郎が外国の曲から「採譜」したとの資料があったらしいこと。

もう一つの理由として、ある声楽家が東欧でこのメロディーを唄った時に、ポーランドの人が、「どうしてその曲を知っているのだ、それは自分の国の歌だよ」と驚いていたこと。

更には、我々が馴染んでいる「荒城の月」は、滝廉太郎が作曲したものとは少々異なり、後に山田耕作が編曲したもので、テンポを二分の一に遅くし、半音上げの部分直していることも、この説に根拠を与えているようだ。

しかし、この歌がたとえ外国の曲を基に作られたとしても、日本人の心情にマッチして広く受け入れられていることは否定できない。それを示すこんなエピソードを、同じ声楽家が披露していた。

ある老人ホームを訪ね、「荒城の月」を唄って皆に聴いてもらった時のこと、それまでベッドに横たわってアーアーと云っていただけの老人が、この歌を聞き始めると表情が変わった。二番目が始まる頃には、ベッドの上に起き上がり、真剣な表情で聴きはじめた。

歌がおわると、「私の好きな歌を唄ってくれて有難う」と云って、側にいた人たち皆が大いに感動したという。

小さいころから唄い聴きなれた曲は、心の奥深くにしまい込まれていて、その曲を聴いたことがきっかけで、脳が活性化したのであろう。

参考：声楽家 長野安恒氏の話し（NHK のラジオ）